幼児の間食に関する一考察

相模女子大学　砂田恵一
保育医学研究会　村松功雄

幼児の間食が規則正しく与へられているか、不規則で、でたらめに与へられてはいまいか。私共は幼児の**健康相**を通して、糖分過剰の偏食を見出す事例が少くないので、一応概論的に調べた一端を発表して、御批判を乞いたいと思う。

調査は本学々生の夏、冬の休暇帰省中に集めた資料を中心としたもので、二―七年の男児六一五、女児五九八、計一二一三名につき一週日の観察を記録したものです。

規則的に時間をきめて間食を与えられていた者が三三%、反之不規則のものが六七%で、1/3と2/3で、多数は不規則間食であるといえる。

その種類は飴、キャラメルの類と穀類で作られた含糖菓子が第一位（五八%）であることは想像の通りで、次が果物と野菜類（二五%）、三位が、ミルク、卵の類で（一五%）、他は一般の飲料その他であつた。

ミルク類は規則的に与えられていたものが一五%、不規則の群が九%を見出している。ミルクを与える家庭が、これを規則的な間食として比較的多く使つていることがわかる。

都市と農村との比較では余り大した差異は見られないが、ミルクが農村（九%）よりも比較的都市（一五%）に多く見られることは、若干都市の文化性を思わしめる。甘い菓子については、都市も農村も、なべて同様に与えられているといえる。

次に年令別に多少の相違が見られる。甘い菓子が年令と共に増加の傾向（五三%→五八%）があるのに対し、ミルク類が減少の傾向（一八%→九%）にあることは、幼児から学童に進むにつれて、蛋白源である牛乳の消費が減少していることを物語る。

倘乳歯に3本以上のむし歯を発見した群三三二名（三三%に当る）についての体重を、同年同月令の標準値に対する指数を計算してみると、指数七〇台のものが最少で、指数一〇〇より劣つているものが多数ある。これは指数値の上から概論すると、栄養失調の状態といえるので、間食とむし歯の関聯性にかんがみて、**39頁に続く**

の反面、第五表2で、短所として現われた項目は、人間形成の為の教育、大衆の為の幼児教育の使命を幼稚園が充分に果しているかについて反省せしめられる。以上綜合して、現実の保育内容は、その本来の形が、何らかの原因で歪められているに過ぎないのであって保育内容そのものに対する再検討よりは、むしろ保育内容を歪曲している原因の探索と除去が必要なのであり、これが間接には保育内容の再検討という事になろう。

(3)保育内容歪曲の原因と考えられるもの

イ、幼稚園の大半が私立である為、経営者若しくは園長は、その経営の故に、教育の理想よりは誤まれる考え方に妥協又は迎合させられる機会や誘惑が多い。

ロ、保育の任にあたる教員が不足し、助手が可成多く、その為、教養や技術が不充分で当然幼稚園の保育の基礎となるべき内容が困難で実行し得ず比較的楽な皮相な知的方面に走る可能性が強い。

ハ、国立、私立小学校への入学準備教育が幼稚園へも、世の親達を経て進入して来ている。そして、これと幼稚園の経営問題が結び付くことにより保育内容は重大な支障を受ける。

ニ、小学校側は、余りに小学校中心の教育観が強く、就学前教育を余計なもの、邪魔なものと考えている事が屢々見られる。

ホ、同じ幼児の取扱いながら、幼稚園、保育所間の連繋も余り充分とは云えず、親も夫々の機能を良く知らない。

ヘ、幼稚園、小学校の相互連絡が全くない。

27頁より続く 注目すべき顕著な事実と考えられる。

私共は日常の幼児健康相談の臨床上の経験から、「食慾のない子供」「夜ねむりの浅い子供」「落つきのない、いらいらした子供」俗にいう「癇の高い子供」ときどき「自家中毒をおこす子供」などの食生活の内容を調べる場合に、十中の八、九彼等の間食のかたよりに気がつく、而もそれが多くの場合、甘い菓子の異常欲求であり、過剰摂取の結果である。極端にいえばその中毒とも考えられる。

で、承知のように、糖分過剰はビタミン特にBの不足を起すからいいかえれば彼等は多少に拘らず明らかに脚気の症状を現わしている。かかる子供の保育の中心を何処へもってゆくか。これを保育的には糖分過剰の是正にありと思う。勿論脚気症状は医療行為及び食生活の改善によりしてゆくことは一応可能ではあるが、更に離乳期の栄養補給について保育者を医学的及び心理学的観点から保育指導することは非常に重要視すべき問題と考える。